知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【日時】平成 27 年 11 月 27 日（金）午前 10 時～12 時

【会場】伊豆の国市長岡総合会館　アクシスかつらぎ

1　出席者

・　発言者　伊豆の国市において様々な分野で活躍されている方

６名（男性３名、女性３名）

・　傍聴者　105 人

2　発言意見

	項　　目	頁
発言者１	新規就農者の取組について	2
2	元気な生コンネットワークについて	4
3	女性消防隊の活動について	8
4	青少年活動推進員会の活動について	11
5	伊豆の国市の芸伎文化の継承について	15
6	伊豆地域の文化財について	18
傍聴者１	西伊豆へのモノレール建設について	24
傍聴者２	マンションの老朽化について	25
傍聴者３	富士山静岡空港を利用した取組について	25
傍聴者４	外国人への対応について	26
傍聴者５	伊豆の交通について	27

【川勝知事】

皆様、おはようございます。この広聴会というのは、皆様方の意見を広く聴くというそういう趣旨のもので、伊豆の国で活躍されているさまざまな分野のリーダーの方々、男女３人ずつ選んでいただきまして、今日はゆっくりお話を承って、それを県政に生かしていく、また伊豆の国の皆様方のお役に立てるようにしたいというそういう趣旨でございます。

よくありますいろんな会議で、ただただ顔と顔を合わせるような会議ではありません。

今、韮山が世界文化遺産の一角を構成するようになりまして、また道路が、伊豆縦貫が通じましたために、また圏央道のミッシングリンクがなくなって、今混雑で皆さんうれしい悲鳴をあげられているというのじゃないでしょうか。この伊豆の国の持っている潜在力、場の力、歴史、伝統、文化、また景観ですね、こうしたものが今大きく開花しようとしていると。まさに世界に向けてＰＲをし始めた、そういう感がございまして、その意味でこの広聴会というのをぜひここで開いて、皆様方と心をあわせまして、この伊豆のど真ん中から世界で最も美しい伊豆半島の人々と、また持っている地域資源をＰＲしていこうというそういう会でございますので、長い時間でございますけれども、どうぞお付き合いのほど、よろしくお願い申し上げます。

【発言者１】

皆さん、こんにちは。伊豆の国市でイチゴをつくっております発言者１と申します。本日はよろしくお願いします。

新規就農者ということなんですけれども、新規就農者というと、最近農業を始めたとか、そういうイメージを持たれるかもしれませんが、そうではなくて、他の産業から農業に参入してきた、そういう人を新規就農者と呼んでおりまして、10 年たっても 20 年たっても新規就農者と呼ばれる。私もこの農業を始める前は、農業とは全く違う仕事に 13 年間携わっておりましたが、農業の将来性に魅力を感じて、静岡県の就農支援事業を利用して農業に参入してきました。

私のような新規就農者が、この伊豆の国では今どんどん増えておりまして、今年の秋、作付けした人を入れると今 60 人以上の新規就農者がこの伊豆の国におります。そのうちの 16 人がイチゴをつくっておりまして、残りのほとんどがミニトマト、１名だけバラで頑張っておられる方がおります。

この新規就農者、全国的には３割の新規就農者が生計の目途が立たないなどの理由で、数年以内にやめてしまっているというのが現状です。ですが、この伊豆の国の新規就農者は、まだそういうやめてしまったという人が１人もいません。これはすごいことだと思うんですけれども、私個人的に実際に農業を始めている者としては、やはり結構厳しい。その３割という数字が納得できるというか、おかしくない数字かなと実感はしています。

まず最初、何が厳しいのかというお話をしたいと思います。伊豆の国農協のイチゴ生産者、これの平均の作付面積が約２反、２反というのは 2,000 平方メートル、大体 50m×40ｍのビニールハウスぐらいが平均的な面積なんですけれども、ここで昨シーズンの実績で約 1,000 万ぐらいの売り上げが上がっております。この売り上げから、重油、暖房費とか、肥料だとか農薬だとか、出荷にかかるもろもろの経費、これを引いた農業所得、これが 300 万から 400 万円というのが平均的な農家の数値です。

我々新規就農者は、その農業所得から設備投資にかかった費用として約 200 万円返済、これを 10 年間返済しないといけません。ですから平均的な収量しか出荷しないと、残りの所得としては 100 万とか 200 万、このくらいになってしまいます。これではやはり安定した農業経営というのは無理で、生活も非常に厳しいレベルになってしまうということで、我々新規就農者は、その平均よりも高いレベルを出荷しないといけない、それが現状です。

昨年の実績で言いますと、産地の平均の単位面積当たりの収量が４トンに対して、新規就農者は 5.5 トン上げております。この 5.5 トンの収量というのは、私の経験上、それで何とか生活ができるというレベルが 5.5 トンです。安定した経営を目指そうと思ったら、６トンぐらいの収量が、新規就農者の当面の目標になってきます。

この６トンというのは、その平均的な収量４トンの 1.5 倍なわけですね。これは口で言うほど簡単ではございません。ですので、私はその６トンというのをだれでも達成できるように、２年前に経験の浅い新規就農者を集めてグループを立ち上げました。そのグループでは栽培にかかるさまざまな条件、それから出荷量、それから各種経費、こういったものをそのグループの中ですべてオープンにして、メンバー同士で比較検討して、各自の経営を改善していくと、そういう活動を始めました。

まだ２年間だけしかやってないんですけれども、実績としてはメンバー全員が平均反収６トンを超えることができて、経費も初年度よりも削減できているということで、成果は見え始めている。今年もその活動を続けておりますので、さらなる生産性の向上を目標にやっております。

こういった新規就農者は収量を上げなきゃいけないというのがあるんですけれども、イチゴというのは、そうはいっても品質がやっぱり一番重要、ここは生産者じゃなくて消費者の立場から言ったら品質が重要なわけですけれども、そこについても我々新規就農者はかなりこだわりを持って生産しておりまして、今年の２月に静岡県の新しいイチゴ「きらぴ香」を皇室に献上するという機会があったんですけれども、そのときに結構厳しい品質検査があったわけですけれども、それをこの厳しい品質検査を通った人が伊豆の国には２人おりまして、そのうちの１人が新規就農者でした。

また、来年 30 回目を迎える伊豆地区のイチゴ品評会というのがあるんですけれども、これも去年と今年２年連続、金一席といういわゆる県知事賞というのを２年連続で新規就農者が取っております。このように我々新規就農者はいろいろ、産地を盛り上げようと頑張っておりまして、これからもどんどん仲間が増えればいいなと思っております。

私がイチゴを始めた 10 年前、伊豆の国のイチゴ農家は 230 軒ありました。今現在我々新規就農者 16 人合わせても 160 軒ということで、70 軒ぐらいこの 10 年で減ってしまっております。逆に言うと、新規就農者の受け入れる要素がそれだけ増えているというふうにも考えられますので、静岡県伊豆の国市には就農者の脱落者が１人もいないということを武器に、ぜひこの就農支援事業を発展させていただいて、この「イチゴ王国伊豆の国」を復活させていただきたい、そう思っております。御清聴ありがとうございました。

【発言者２】

皆さん、生コンにちは。伊豆の国市と言えば、もう皆さん余りにも有名なのがイチゴとか、反射炉といったところだと思いますけれども、実は余り知られていないのが、日本一の生コン屋が実は伊豆の国市にあったんですよね。御存じない方が多いかと思います。

なぜ生コン屋がここにいるのかと言いますと、実はですね、生コンて御存じでしょうか。ぐるぐる回るあの生コン車というやつで、どろどろのものを運んでいるんですね。それ実は皆様が住んでいるお家だとか、あるいは橋とか、ああいったものに必ず使われているんです。

生コンて見たことないと思いますが、実は生コンクリートって、世界で水の次に流通している素材なんですよ、生コンて。なのに知られていない。その知られていない生コン屋日本一がここにいるということなんですね。

生コンが知られていない理由というのは幾つかあります。それは業界も余り努力をしてこなかったこともありますし、カルテルというのをやって、本当はやっちゃいけないこと

なんですけれども、日本では唯一認められていて、お手てつないでよろしく談合しているわけなんですけれども、こうしたことが社会的に余りよしとされなくて、経済成長のときにはよかったんですが、どんどん、どんどん衰退していきました。

以前全国には 5,000 工場ほどの生コン工場があったんですが、現在は 3,000 工場までになってしまった。なぜか。コンクリートというのはどろどろの状態で、熱々で運ばなければいけないので、おそば屋さんとかピザ屋さんと一緒で、御当地でしかお仕事ができないという特徴を持っています。つまりは大きい拡大戦略をとりづらいような商材になっていますので、どうしても地域地域で小さくまとまってしまった。これが地域に雇用とか需要がなくなってしまうと、生コン屋、おまえ要らないよということになってしまうわけですね。

私が 15 年前にこの伊豆の国市に舞い戻って、元々伊豆の国市に生まれて、伊豆の国市に育っているわけですが、大学へ行ってからまた戻ってきて生コン始めたときに、やっぱりずっと下がり基調の業界なので、これはやばいと。こんなことでは 30 年、40 年と皆さんの自宅やビルや橋や道路の基礎資材を提供できないなということで、一念発起して、全国の生コン屋さん立ち上がれと、伊豆の国市から発信したわけです。

人口がどんどん、どんどん減ってしまうような局面というのは、伊豆の国市はまだましですが、すばらしい地域ですから。ただ生コンという業態で言うと 3,000 工場あったのが、あちこちで冷え切っている。人口がなくなってしまったら生コン屋は要りませんというわけにいきません、橋やビル、道路は必ず必要なわけですから。

といったところで、全国の生コン工場にこのままじゃいかん、全国、地域とか枠組みとか談合とか、とりあえずやめておいて、ＩＴを使って共同しようぜといったところが「元気な生コンネットワーク」、私どもが主催している生コン屋のプラットホームになります。

どういったことをやっているかというと、生コンというと地味で、余り役に立たないと思いがちなんでしょうけれども、透水性コンクリートという分野があります。わかりやすい言葉で言いますと、ゲリラ豪雨とか大洪水、ああいったものは何で起こっているのかというと、昔であれば地表が全部むき出しになっていましたので、地下水系に水がそのまま行きました、雨がそのまま行きました。ただ、今全部地表はアスファルト、コンクリート、あと治水、排水が全部整備されているので、なかなか地下水系にそのまま水が行かないようになっています。

以前であればいいんですけれども、ヒートアイランド等で気象が非常におかしくなって

くると、局地的に豪雨がある。そうしたものは地表を覆っているところとか、排水設備がなかなか負担できないので、局地的にゲリラ豪雨とか洪水になってしまう。痛ましい事件がここ数年あります。

実はこれを直せるのは生コン屋なんですよ。実は。なぜ生コン屋が直せるかというと、水を通すコンクリート、雷おこしみたいなコンクリートですね。ああいったものを私たちが発見して、生コン屋では初めて私たちが発明して、それを全国の生コン屋さんに送り込んでいます。

伊豆の国市の１社だけがやっていても仕方がないんですけれども、私たちがつくったものを全国の生コン工場に発信して、その地域地域で全部生コンが水を通すようになればいいじゃないですかと。水を通すと地下水系にそのまま還元されますし、また気化熱で、アスファルトとか普通の地表に比べて 15 度ぐらい温度が下がるんです。こういう環境も、１社だけではなくて全国にプラットホームを持って私たちが発信する、そういうことをやっています。

あともう１個、生コンと言えば世界で水の次に流通していると申しましたが、それだけに、そのごみたるや大変なことなんですね。生コンが現場に行きます。全部使ってくれるわけではないんです、実は。３～５％は要らないよといって戻ってくるんですね。そのごみ、今までどうしていたか。捨てていました。本当に水の次の材料を捨てていたと、とんでもないですよね。一部はリサイクル砕石といって、専門的ですが、再利用はされていますけれども、ほとんどは捨てられていた。

ここに目をつけたのが、また生コン屋。実は自社ような資力・人力が乏しい会社では、なかなかそこまで開発はできなかったんですが、イタリアの世界で第３位の建設資材メーカーと伊豆の国市の生コン屋が出会いました。そこで生コン屋が困っていたごみ、生コンのどろどろのごみをたちどころに砂利にする。この砂利というのは実は生コンの原料なんですけれども、この砂利をまた生コンに使うという還元を生み出しました。

これも実は１社ではできないことでして、全国の生コン屋さんとつながることによって可能になった。今ＩＴがありますので、成功事例とか勝ちパターンというのは、広く海外から求めることができます。小さな地域で小さな商売しかできないと思ってあきらめるのは簡単ですが、今全国、全世界とつながって生コンクリートに革命を起こそうとしています。

最後ですが、そうはいってもですね、生コンは地域に需要・経済がなければ全然成り立

たないです。結局はどんなに頑張っても地域に経済がなければ成り立ちません。そんなわけで生コン屋のくせにヴェネツィア会といって、伊豆の国市により多くの人に来てもらおうというプロジェクトをやっています。

というのも、イタリアの研究員の息子が当社に入ってくれました。せっかく来てくれて建設資材を通して地域の交流が生まれているので、伊豆の「伊」とイタリアの「伊」は一緒じゃないかと、そういうこじつけの元、さまざまな業種の人たちが集まって、特に若手で伊豆地域とイタリアをつなげていきたい。できれば静岡空港がミラノとかマルペンサ空港とかと直行便ができてほしい。以上でございます。

【川勝知事】

どうも発言者１さん、それから発言者２さん、ありがとうございました。ただただ感心して聞いておりました。「ミスター」と言えば長島さんですけれども、「ミスターニューファーマー」、「ミスター生コン」と形容して全く遜色のないお２人の話であったと思います。

発言者１さんは 10 年前に来られて、13 年ぐらい違う仕事をしてこちらでイチゴを始められて、そしてお話の中身は非常に数字で裏付けられて具体的で、年間６トンの生産をすればそれでやっていけると。農協の方は残念ながら４トンということだと。これを 5.5 トン、さらに６トンに増やしていけばいけると。そしてそれを可能にするために、仲間とすべてオープンにすると。恐らくこの 13 年間の別の仕事をされた経験がそういったところに生きているんじゃないかというふうに思いますね。

そして何より粗製濫造しないで、いい品質のものを出すと。ＴＰＰでこれから攻めの農業。物、特に農産物というのは、価格と品質と同じぐらい重要です。いかに価格が安くても、ひょっとしたら毒性の肥料が使われているんじゃないかとかいうふうなことがあると、それを買うことを控えるでしょう。ですから品質が高い、安全である、そしておいしいと、そして見た目も美しいということがとても大切で、それを決して落とさないというか、こうした中で「紅ほっぺ」、長年の改良の中から「きらぴ香」というものが生まれまして、これは皇室のお口にも上っているというところまで来ておりますので、「イチゴ王国」、これを復活させるいわば基地ができたかなと。

そして 230 軒だったのが今 160 軒になったと、こういう数字は耕作放棄地があるということでしょうね。実は静岡県全体で１万 2,000 ヘクタールの耕作放棄地が今から５年ほど前にありました。私どもは 2,600 ヘクタール、これを戻したんです。ところが同じ勢いで耕作放棄地が増えているんですよ。ですから耕作放棄地の絶対面積というのは、まだ１万

2,000ヘクタールございます。

ということは、今発言者１さんがおっしゃったように、そこはチャンスだということで、そして成功事例、これはわずか10年弱の間にこれを考える人が東京にいたとすると、自分もそこでやってみたい。そして相談する人がここにいるということになれば、伊豆の国に家族一緒になって入ってくる人が多くなるんじゃないかということで、これまでと違うやり方を言われておりますので、できれば今いろいろ困っていらっしゃる従来のやり方をされている方も、新規と言っても新しい農業のやり方というふうに考えていただいて、そしてこの新しいやり方に協力して乗り出すということをなさったらどうかと。

田方は元々農業としてものすごく肥沃な土地でございますので、ぜひこの「イチゴ王国」あるいはミニトマトもそうです。バラの人も出てきたということで、これ花の半島でもありますので、その消費市場は巨大なものがすぐ近くにございますから、そうした意味でぜひ期待したいし、今日の話は成功事例としてＰＲをさらにさせていただきたいと思いました。

ミスター生コンの話はすばらしいですね。誠にわかりやすい。小学生、中学生にも聞かせたいくらいのきっぷのいい事例といいますか、例えも上手で、雷おこしなんて言われると、なるほどすかすかだと。それから15度も下がると、ヒートアイランドが。しかも自分一人でやらない。ミスター生コンはミスター生コンですから、それで日本一なので、全国の元気なＧ、生コンのＮ、ネットワークのＮで、ＧＮＮですよね。だけども、イタリアの話を聞いてグローバルのＧと生コンのＮとネットワーク、そういうグローバル人材ですね。そういう印象を受けました。

イタリアとの関係を既に結んでおられるというのはすごくうれしいです。生コンを砂利にする、この砂利をさらに生コンにしていくという技術で、人のためになっておられると。そしてそれがいわば日本一の姿じゃないかと思うんですよ。おれだ、おれだと言うのじゃなくて、人に役立つものを全部オープンにして、そしてそれぞれのところでよくなるようにしていく、これが偉いですね。関心いたしました。これからも御活躍を期待したいし、いろいろまた教えていただきたいと存じます。ありがとうございました。

【発言者３】

伊豆の国市の女性消防隊をしています発言者３と申します。本日はよろしくお願いいたします。

私、消防団員なんですけれども、普段の仕事、本業を務めながら消防団員として活動を

しています。活動していく中で消防団って何をやっているの、ましてや女性は何をやっているのというようなことを聞かれることとか、疑問に思うこともあるかと思いますので、今日はそのことについて少しお話ししたいと思います。

私たち伊豆の国市ですけれど、大体団員は延べ人数で 400 名ぐらいが在籍しています。そのうち女性の団員は 10 名ですね。このメンバーで活動しています。

皆さん、ちょっと御存じない方もいらっしゃるかもしれないんですけれども、女性の消防団員というのは全国で今かなり増えていまして、去年ぐらいの数字で２万２千人ぐらい全国で今活動をしているようです。主な活動は、防火とかの啓発活動であったりとか、救命講習の指導とか、そういうものを主にやられている団が多いようです。

私たちのこの伊豆の国市では、平成 22 年４月に女性消防隊が発足しました。私も 22 年１期生で入団しまして、今年で活動が丸５年目になって、これから６年目に入っていくような形になります。

私の入団動機を少しお話ししたいと思います。私はといいますか、皆さんもそうかと思うんですけれども、もうとにかく地震が恐くて恐くて、何か例えば国内外で震災のニュースとかそういうものを見たり聞いたりすると、もうちょっと居ても立ってもいられなくて、どうしようという不安から、こういう救命だったりとか災害対策、そういう勉強会に出ていました。

一時的には自分で行動を起こしたとか、いろんな知識を得たということで、ちょっと安心はするんですけど、例えば勉強会なんかで、「やっぱりこういう災害のときには地域の力が大切ですね」みたいな話を聞くことが多々ありました。では自分の地域だったらどうのかなとか、自分がもし例えば被災しちゃったときに助けは来るのかなとか、疑問だったり不安がものすごくありました。

そんな中、伊豆の国市で「消防団の中で女性隊をつくるよ、一緒にやらない？」というような声をかけていただきまして、それで参加することにしました。先ほど言った地域の力というものは、実際に自分がそちらに参加して体感してみれば、説明してもらったりとか、見聞きするよりも実感できて安心できるかなという思いで参加を決めました。

入った当時は、やはり消防団自体も女性を受け入れるのは初めてですし、消防団自体が何をやるのか、ましてや女性はその中でどういうポジションをやっていったらいいのかということで、ちょっと迷いがありながらも活動を続けていました。

そんな中、応急救護指導員、そういうようなものがあって、これは例えば市民の皆さん

とかに講習なんかで、もし周りで人が倒れてしまったときに自分では何ができるのかな、そういうようなことの救護の方法ですね、こういうものを講習なんかで伝えてやるということを知りました。こういう説明とか、難しいというか、こういうものは女性の方が柔らかい印象を持ってもらえるかもしれないし、堅苦しく考えないで気軽に遊びに来てもらえる感覚でやってもらえるのかなと思いまして、この資格をみんなで取ろうということを目標にして活動を始めました。

早速消防署の方にお願いしまして、御協力いただいて、みんな仕事帰りに勉強会ですね、救護についての勉強会を始めました。でもなかなか時間のやりくりですね、こちらの方が難しかったりとか、初めてのジャンルの体験なので、その厳しさに自分たちで自信を失ってしまったり、挫折しそうなことも多々ありました。そんなときなんですけれど、ちょうど 2011 年、東日本大震災が起こりました。

今まで私自身も救助とか、そういうものは消防署の仕事でしょというような感覚で見ていたんですけれども、実際テレビで孤立して救助を待っている人たちとか、そういう人たちの映像を見ていると、この人たちが救助を待っている間、どれだけ不安な気持ちで待っているのかなとか、そのときに待っている間でも、何か一般の市民の人でもできることはあるんじゃないのかなとか、そんなことを思いました。

消防団活動で各地域を回ることもありまして、意外と山間部とか、自分が今まであまり、話では聞いていたんですけれども、別荘地に住まわれている方もかなりいらっしゃるということを実感していましたので、これは人ごとではなくて、伊豆の国市でもこういう孤立のケース、救急車がなかなかたどり着けないというケースがあるんじゃないかなということを改めて思いました。

そんな話を隊員みんなで話していたりしたこともありまして、私たちの勉強会にもだんだんといいますか、かなり熱が入ってきました。現在では隊員の 10 名中７名がこの指導員という資格を持っておりまして活動中です。残りの３名も今取得に向けて勉強を続けています。

普段は消防の講習ですね、それとか地区での防災訓練、そういうもので指導をしたり、地域のママさんサークルみたいなところに呼んでいただいて、乳幼児の救命指導も行ったりしています。それ以外にも女性隊では防火啓発活動ですとか、式典で司会をしたり、また活動の撮影をしたり、それからラッパ隊に参加している女性もいます。みんな家庭や仕事、プライベートの時間などやりくりしながら、明るく楽しく活動しています。

ここで消防団全体のお話をちょっとさせていただきたいのですけれども、今団員の確保が大変厳しくて、各団各隊、分団が大変苦労しています。やっぱりどうしても仕事で時間のやりくりが難しいということもあるんですけれども、長く続いているこういう消防団活動ですので、積み重なったマイナスのイメージのある人もいるのかなと思いまして、ここで私が消防団活動をやってきた感想を述べたいと思います。

私の活動してきたイメージは、安心して参加できるボランティアだなというふうに感じました。これは地元の地域密着型のもので、それから活動しながらいろんなことが学べる活動です。そして一緒に活動する仲間が常に一緒にいてくれますので、心強くて、安心して参加できるので、一人で突破的に地域に行くボランティアよりも、安心してできるなというような感想を持っています。

それから消防団活動を通して地元を、先ほど言いましたけれども、山間部とか別荘地とか訪れてみて、地元を改めて知る部分もかなりありました。今までは、例えば行政とかそういうところに期待することが多くて、自分から地域を理解していく努力が少し足りなかったのかなということを活動を通して考えさせられました。

あと、皆さんにちょっと知ってほしいことがありまして、うちの女性隊もそうなんですけれども、20 代の若い隊員たちがいるんですが、その隊員たちが地元が好きなので伊豆の国市消防団で活動したいと言ってくれています。こういう気持ちで参加している人たちも多くいるということをぜひ市民の皆さんに知っていただきたいなと思います。

私自身は、地域の安全とか平和、こういうものは住民の方の心の平和から始まるのかなと思っています。私が以前思っていたように、災害に対する不安な気持ちとか、そういうものは消防団活動とかを見たりとか、感じてもらうことで、和らぐことがあるのではないかなと思っています。

私の希望としましては、ぜひ市民の皆様に消防団の活動を理解いただいて、うちの伊豆の国市の格好いい消防団の団員たちの活動を見てあげて、そして応援してあげてください。

最後にですけれども、伊豆の国市消防団は団員を募集中でございますので、ぜひ皆さん、御興味がこの中である方とか、御紹介していただける方がいらっしゃいましたら、伊豆の国市の危機管理課までお問い合わせください。お待ちしておりますので、よろしくお願いいたします。本日はこのような機会をいただきまして、誠にありがとうございました。

【発言者４】

伊豆の国市青少年活動推進委員会事務局の発言者４と申します。よろしくお願いいたし

ます。

このたび、私どもの団体が 11 月３日の文化の日に知事表彰を受けました。本日は団体がどのような活動をしているのか、皆様にぜひお知らせしたいと思い、参加させていただきました。まずは自己紹介をして、それから団体の沿革や活動の内容、実情、団体への思いなどについてお話ししたいと思います。

初めに自己紹介します。私は横浜の出身で、結婚後は東京や栃木に住んでおりました。主人が実家の家業を継ぐことになり、平成 13 年に家族３人でこのまちに転居してまいりました。団体の活動は、娘が小学生のころ、伊豆の国市子供会連合会の役員をした際に、団体の手伝いをしたことがきっかけで参加するようになりました。今年で９年目になります。

次に団体の沿革ですが、活動は今から 44 年前の昭和 46 年に旧大仁町の青年団ＯＢが中心となって始まりました。平成 17 年の３町合併に伴って、子供会ジュニアリーダーズクラブが加わり、現在の伊豆の国市青少年活動推進委員会となりました。会員は中学生から、上は 60 代の 40 人余りで構成されています。幅広い年齢の男性と女性、さまざまな職業の人たちがそれぞれの持ち味を生かして活躍しています。

活動の内容の主なものを３つ紹介いたします。１つは、市の子供会連合会や、地区の子供会が主催する行事への協力です。市の子供会の大縄飛び大会や貼り絵大会、キャンプ、地区の子供会のクリスマス会や通学合宿などに、高校生から 20 代の若手スタッフが参加しています。

２つ目は、市教育委員会や学校関係機関が主催する行事への協力です。小学生向け子供教室で野外炊飯の講師として参加しました。静岡県東部ふれあい体験塾にはスタッフを派遣しています。学校関係機関への協力では、小学校単位でつくられましたおやじの会の学校に宿泊するという行事に参加しました。

３つ目は、ふるさと学級です。これは昭和 46 年から継続している活動です。小学３年生から６年生の希望者を対象に、年６回の体験学習講座を行っています。会場は閉校になった小学校の施設を利用しています。野外調理場やシャワー設備もできて、とても活動しやすくなりました。

そこで、春はゲームなどのレクリエーション、夏は水遊びやキャンプ、秋はお月見会、冬はお餅つきやお菓子作りなどを行っています。市内３つの小学校の３年生から６年生が混ざり合った班で、中学生や高校生がリーダーになります。

高学年を対象としたキャンプは、食事のメニューを子供たちで考えて買い物に行き、宿

泊するテントを張って、お料理は薪を燃やした火でつくります。使用する食器は竹を割って、お茶碗もお箸もお皿もすべてナイフで自分たちでつくります。便利な家電に囲まれた生活をしている子供たちにとっては、生きる力を育むような内容になっています。

年中行事のお月見やお餅つきは、お月見団子をつくったり、臼と杵でお餅をついたり、各家庭で行うのがちょっと大変ですが、子供たちにはぜひ体験してもらいたいことなので、ふるさと学級では実施しています。

続いて、団体の実情です。小学３・４年生で参加した子は、５・６年生でも参加しています。人数はぐっと減ってきますが、中学生、高校生になっても参加する子は、専門の研修を受けて、行事ではリーダーとして大勢の小学生を牽引するという貴重な経験をします。そして高校を卒業すると、大学進学などで一旦伊豆の国市を離れても、就職で仕事で戻ってくると、再び活動に参加してくれる人が何人かいます。20 代が増えると活気が出て明るくなって盛り上がりを感じます。

団体の大人のスタッフも、私のような外様はごく少数派で、ほとんどの人が子供時代にふるさと学級やジュニアリーダーを経験した人です。そこには昔からの長い友人関係が続いています。

最後に、団体への思いです。ふるさと学級を実施している小学校の付近は、自然の豊かなとてもきれいなところです。コンクリートだらけの横浜で育った私は、子供のころに箱根でかいだ森の匂いを思い出します。季節ごとの風の匂い、空や山の色には毎回感激しています。水もとても柔らかいと感じます。

子供は匂いや味などの感性情報を丸ごと記憶するので、伊豆の国市の豊かな自然、ふるさと学級での食事やキャンプファイヤー、大勢で遊んでことが楽しかった記憶として残ってくれたらうれしいです。それが長い人生を歩んでいく上での心の糧となったり、将来地元を離れたときも、心の奥の情景となったら、本当に素敵なことだなと思います。

今後もたくさんの小学生が参加してくれて、スタッフが生き生きと活動できるような団体になるよう工夫を凝らしていきたいと考えております。以上です。御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】

今度は女性の方のお話を、全く違う分野ですけれども、お聞きしましたが、それぞれ先ほどの２人のミスターに劣らず、大変すばらしいお話をお聞きしまして、まずは発言者３さん、平成 22 年から女性の消防隊員ができるようになりまして、地震あるいは災害に対す

る御関心が高かった発言者３さんは、そこにお入りになって、応急手当とか救護だとか、さまざまなスキルを身につけなられたのだというふうに思いますが、実は消防隊というのは厳しい仕事でございますので、男性の仕事という通念がございます。

そして今、言われたように、女性としてすることがたくさんある。実は東日本大震災のときに被災されている方々、女性には女性独自の、特に赤ちゃんを抱えている方だとか、そうした方には女性にしかできないような救援の活動があるわけですね。ですから災害には女性の役割をもっと見つけなくちゃいけない。私どもの危機管理部というのは、すべてに優先した立派な組織をつくっておりますけれども、大半がまだ男性です。

ですから女性を入れ込んでいく必要があるというふうに思っておりまして、そのためにはやはり訓練をされる方たちを地元で育てないといかんというふうにも思う次第で、ともかくいいことをしているわけですから、善意でやっているボランティアの仕事、しかもそれぞれ仕事を持っていると。しかし、いざというときに役に立とうじゃないかというそういう気持ちを持っている人たちが結ばれたりすると、１足す１は２から３、３足す４ぐらいにもなるというように思うことなんですよ。私もぜひ応援をしたい。こういうやり方を他の市町にも伝えてみたいと。

それから発言者４さん、昭和 46 年からというと、1971 年ですから今 2015 年ですから文字通り 45，6 年と、半世紀にわたってふるさと学級や子供会とか、あるいは学校の先生のお手伝いとか、実に見事な御活動をされてこられましたので、この青少年の推進会が知事表彰を受けたわけです。今日お話聞いていて感動しますよね。

彼女は県外から来たわけでしょう。しかしこちらで生まれ育った自分の子供がいて、高校生やお兄ちゃん、お姉ちゃんにいろいろ鍛えていただいたと、ふるさと学級でたくましいお兄ちゃん、お姉ちゃんの指導を受けながら、そこで竹の箸をつくったり、飯合炊さんして、それも一生の思い出だと思いますので、それを返すということで、順繰りになっているというのはすばらしいですよね。

そしてこれが本当に大切な教育じゃないかと思うんですよ。学校の先生の教場における教育は、これはもう全国共通でしなきゃならないことで、ちゃんと指導要綱に書いてあるんですけれども、ふるさとについて子供たちがよく知って、お父さん、お母さんはふるさとで働いているわけですから、そのふるさとについて知って、そしてお兄ちゃん、お姉ちゃん、あるいはおじちゃん、おばちゃんと出くわすという、それが同窓生、回っているということが知事表彰の大きな理由です。

そして 20 代の青年たちが入ってくると、やっぱり小さな子供たちにとってもお兄さん、お姉さんの感じがありますし、今子供の数が必ずしも多くないので、違う世代の子が会うというのが少のうございます。しかし、野や山で一緒にすると、自分より幼い子は、やはり力が弱いので親切にしなくちゃいけないし、逆にわんぱくの少年も、年上の人に対してはかないませんから、強い人がいるんだという自分の限界を知ったりしますので、そういう社会での大人を通じての教育というのは、子供の教育にすごく大切で、こういう社会教育といいますか、あるいは地域ぐるみ、社会総かがりというその成功事例だということです。

今私どもは、教育は地域ぐるみ、社会総がかりでやろうということで、政府の方も、いわゆる総合教育改革に首長は出なさいと。首長はいろんな人がいますので、くせがあったり、あるいは偏向があってはいけないので、私は地域自立のための学校づくり・人づくり実践委員会というのをつくって、そこには音楽家や、あるいはスポーツマンや、あるいは会社の社長さんや、農業士や、あるいは水産をやっている人たち、各界各層の人に入っていただいて、その人たちからいただいた御提言を私は受けて、教育委員会に出ていきまして、その御提言を教育委員会の方で生かしていただくというそういうシステムをとっているんですが、そういうものをすぐ生かせる組織が青少年の活動推進員会だというふうに思っておりまして、こういう試みをさらに私どもはロールモデルというんでしょうか、地域のモデルとしてつくり上げていきたい。

消防隊はこれからますます女性が、少なくとも 10 人に１人は女性隊員というところを目標にしてほしいというふうに思っております。そしてまたこちらの方は社会教育ということで、私どもはこれをＰＲをして、私は知事表彰という形でＰＲしたつもりですけれども、直に聞くと、やはり学ぶところがたくさんありまして感じ入った次第でございます。ありがとうございました。

【発言者５】

伊豆の国市で芸者とカフェ経営をしております発言者５です。今日はこのような席に呼んでいただきまして、最初はすごく戸惑いました。私なんかがこんな席に偉そうにと思いましたが、今の芸者衆のこの現状を伝えたくて来ました。

まず簡単に自己紹介ですが、私は母も芸者、姉も芸者という花柳界に育っていました。小さいときから芸事を学び、とても嫌で、芸者になるのは絶対にやめようと、長年エステシャンをやったり、営業をやったりと、いろんな職種をしまして、昔この長岡が嫌でカナ

ダに行きまして、ツアーガイドをやっていました。

そこで、いろんな向こうの方に、「何で日本人は日本の文化を大事にしないの」ってすごく言われたんですね。で、向こうには 100 年ぐらいしか歴史がないと。日本はたくさん歴史があるのに、何かアメリカかぶれの人も多いよねって言われて、そこで、あっ芸者も文化なんだなって思い、帰ってきてから芸者をしました。

そうしましたら、今まで自分が身近にいた存在の芸者衆のイメージが全然違って、お座敷に出た時点で、本当にプロなんだと、おもてなしのプロだとすごく感じまして、いい加減な仕事ではないんだなって自分が実感しました。

そこで、私が身近で育って、この芸者文化を全然わかっていなかったんだから、ほかの方はわかるわけがないよなと思いまして、そのころも全盛期 400 人いた芸者衆は 100 人ぐらいになっていましたので、昔の賑やかな長岡で育っていますので、またそういう長岡に戻っていただくには、若い女の子たちが芸者さんになってもらわなければ、この花柳界はだめになるなと思いまして、そのころはボイスブログというのを始めまして、声で配信、パソコン開くとポップなカラーで、若い子が食いつくようなかわいらしい画面にしまして、日常の芸者衆の生活を声で配信して、ラジオみたいな形で配信して、そのときも何人か若い子たちがそれを聞いて芸者さんになりたいと言って来ていただきました。

今現在芸者衆 20 人以下になってしまいまして、粋な世界で生きていた私たちですが、そんなことは言っていられなくなり、やっぱりお座敷が減りまして、アルバイトをしている芸者さんもたくさんいます。そんな中でやっぱりお座敷が増えないと生活は成り立たない。絶滅危惧種に認定していただきたいぐらい本当に減ってきてしまいまして、なぜかなといいますと、やっぱり粋な昔のそういうスタイルが減ってきて、でもお座敷で女の子を呼ぶ方はそんなに減ってはいないんですね。

コンパニオンさんは日本全国どこにでもいます。芸者衆は日本全国いるところはもうみんなどこも減っているんですね。やはり調べますと、県とか市で保護しているところがたくさんありまして、そういった中で自力ではとても私たちも日々の生活がやっぱりできなくなっていますので、何とか県でも市でも保護していただかないと、減っていってしまいますね。

私たちもただ人にお願いするのでは何も努力をしてないと言われてしまうので、ちょっと考えまして、若い女の子たちを募集しよう。ここはあやめ御前頼政の地なので、「あやめさん」という名前をつけまして、アルバイトの女の子たち、18 歳から 29 歳ぐらいまでの女

の子に、まずお座敷に来てもらう。一緒に入ろう、芸はやらなくていいと。芸は私たちがやるし、着物も美容院代も全部こっちで見るから、とにかく初々しく着物を着て、一緒に座っていて、そこで私たちがプロの接客、それから着物の所作、そういったものを見せて、そこであこがれてもらって、芸者さんになりたいなって思ってもらうように、そういう募集をつくりました。

ただ、やっぱりおねえさんたちを説得するのは難しく、やっぱりプロなので、芸もできないのにという反感もいろんなことで言われましたが、そこは元々営業で私も育っていますので、口はうまいので、おねえさんたちのお座敷は減らない、コンパニオンさんたちを呼んでいる人たちに、宴席で、上座の人は芸者さんがいい、下座の方はコンパニオンさんがいい、そういうお座敷を芸者さんとセットで、あやめさんは単独では呼べないんですね。セットで呼ぶと。４人だったら２・２、必ず２人は芸者さん、２人はあやめさんという形で呼ぶということで、呼代という私たちがいただくお給料みたいなものですが、そちらも芸をやらないので、お客様が支払うのも安いですね。私たちより安い。そういったことで文句のつけようがないような内容にして募集しました。

11 名今入りまして、「あやめさん」というグループの中にいろいろな芸名、みかんちゃん、いちごちゃん、たくさんのフルーツの名前をつけたらなくなってきてしまいまして、お花の名前も、さくらちゃんとか、いろいろつけて、ただやはり若い子なので、アルバイトですのでプロ意識はないので、「この日お座敷があるんだけど」、「ええっ、その日はバーベキューで行けません」とか、そういった中で 11 名では少ないんですね。20 名、30 名、籍を置いていただかないとうまく回らないかなと思います。

私は、例えば大学とかそういうところにおもてなし科みたいな、セミナーみたいなものでもいいんですが、そういったところで学生さんたちにおもてなしのものを教えるところがあってもいいんじゃないかな。そういう方たちが実習で土日だけ出るとか、そういうこともやっていただけたらなと思います。

いろいろ中国や韓国、それから上海万博でも、この伊豆の国市として私たち行っておりますが、そんな中で韓国に行ったときは、キーセンの方の踊りの舞の共演をしましたが、向こうは国家公務員の方たちが踊りを踊りました。現役の芸者さんというか、そういう方はもういないということで、すごくうらやましがっていただきまして、この長岡ももう 20 人弱ですが、昔 400 人いたころは、京都と伊豆長岡の芸妓学校法人が全国で２校だけだったということで、そういう歴史もございますので、まだ何人か残って頑張っておりますが、

県でも保護していただいて、県の中にも熱海や伊東、それから清水なども芸者さんいますが、いずれは芸者サミットなどもやりたいなと思っています。

そんな中で見番が残っている花柳界。見番というのがとても大事なんですね。この見番の経営が、やはり粋な世界で過ごしてきた方たちなので数字にすごく弱いです。今回「芸妓まつり」というお祭りが毎年ありますが、初めて芸者衆が実行委員に入りました。私もさせていただきましたが、お金がなくては何もできないんだなというのが、お金のお話は芸者衆はタブーなんですね。そういったことは無粋なので余りというけれども、やはりポスター代とかいろいろな経費がかかります。やはり県の方でも予算をいろいろ組むかと思いますが、どんどん下がっているんですね、その予算が。その中ですばらしい舞台をやれと言われても、やはりできない。

そういった現状がありますので、ぜひ県・市でこの芸者衆を守っていただきたい。でないとこの伊豆長岡は何の特色もなくなってしまうんじゃないかなと、私は私の立場でそう思います。御清聴ありがとうございます。

【発言者６】

皆様、こんにちは。今日はこういう席に立たせていただきましてありがとうございます。私どもＮＰＯ法人伊豆学研究会というものを運営しております。

ＮＰＯというのは、皆さん御存じの方はあんまりいらっしゃらない、何かよくわからない変な団体だみたいな、そういうように受け取られる方々もいらっしゃって、なかなか活動がうまくいかない面もあるんですけれども、今年ちょうど設立 10 周年を行いまして、何とか 10 年活動ができたかなというふうに思っているところです。

５年前に実は『伊豆大事典』というものを作りまして、伊豆半島中の文化財であるとか観光資源であるとか自然環境であるとか、そういうものを盛り込んで事典をつくりました。当時 1,500 冊印刷をしまして、おかげさまで今年全部完売をしてしまいました。1,500 冊じゃなくて、業者の言うとおり 2,000 冊作っておけばよかったかなって今思っているんですけれども、いまだに引き合いがありまして、これから電子書籍に変えて少し流通をさせていこうかなというふうに思っているところです。

私たちの活動は、今現在会員が約 150 人、おかげさまでＮＰＯとしては県内でも大きな団体になりつつあるのかなというふうに思っております。私たちのやりたいこと、今こういうふうなモットーで進めているんですが、カルチャー・フォー・ユーというふうに、Culture、文化ですね、フォーは実は４、それから for、ためにというのにかけて、そして

You、あなたのためにと。あなたのための文化は何かということですね。文化を守り、そして伝え、そして、つくり広げると、そういう活動をしていきたいということで、今 150 人が緩くつながっている団体です。

昨年は、おかげさまで自然環境の分野では県の御支援をいただきまして、東京ビッグサイトでＩＦＦＴという展示の方に出展をさせていただきました。これは地産地消ということで伊豆産材を使った家具をつくって、そこで展示をして見ていただこうということで、そういうことで地域の山にある木が有効に使われているということで、自然が守られるのではないかということを提唱して、そこに参加させていただきました。

それから先ほど紹介いただいたんですけれども、地域に居場所をつくろうということで、今コミュニティカフェを運営しています。

ただ、私たちも元々の伊豆学研究会でやりたかったこと、これは文化を守り伝えるというところが大きな柱でありまして、ちょっと伊豆の国市と離れますけれども、つい先日、南伊豆町の吉田というところに行ってきたんですね。この南伊豆町の吉田は、今家の数が 14 軒です。そして人口が 24 人、男性が８人、残り 16 人が女性、そして一番若い人が 70 歳、こういうところがあるんですね。

何が起こっているかというと、そこに白鳥神社という神社があるんですね。この神社が 1564 年の棟札がありまして、もう既に 400 年以上たっている神社があります。その神社を村でもう維持できないので神社庁に返したいということで、年間維持費が３万から４万、神社庁に出さなきゃいけないんですね。それをもう出すことができないので返したいと。村の人たちがそれを決めてしまって、そしてその神社が荒れている状態になっています。

それを見て、こちら伊豆の国市はまだそういうところはないわけですけれども、これは日本全体でこういうことが広がっていくんだろうなというふうに思っています。

こういう過疎化によって地域の文化が消えていってしまいます。それからまた少子化によって家が存続できなくなってきて、そういう中に残っている文化財がどんどん消えていってしまう、こういうものが何とかならないか。そして私たちがこういう活動をしているということで、調査依頼が最近たくさん来ておりまして、もうこれ以上できないと。というのは何ができないかというと、実はお金がないんですね。

調査をしなければ困るわけですので、お金がないんですね。それから人的な面でもとても不足している。特に若い方が欲しいなということで、協力者が欲しいなというふうに思っているわけですが、伊豆の国市は国宝、それから世界遺産になった韮山反射炉、こうい

うものがございます。そしてなおかつ地域に眠っている重要文化財の江川邸があり、いろんなものがたくさんあります。こういう中でできれば伊豆半島の文化の拠点、そして文化財を守るための拠点が何とかここに置かれて、そして行政がやるというと予算を取り、そして次にまたそれを動かしていくための時間がかかります。

でも目の前で、例えば古文書を焼いてしまった、それから家がなくなって、古本や古道具屋にそれを売り払ってしまった、もう目の前でそういうことが次々に起こっているんですね。そういう情報を得たときに急行するんですけれども、今燃やしてしまったんだよと言われてしまうんですよね。それを何とか即応性を持っておきたいなというふうに思っております。私のところにそういう古文書を預かって、もう家の中に入り切れなくなっているんですね。

ですので、そういうものを何とかここの地域を拠点にして、拠点にしてというのは、地域の中でこの伊豆の国市が特別に文化財をたくさん持っているところだということも含めてなんですが、そしてそれを伊豆の国市から発信できるようなそういう体制ができてくるといいなというふうにいつも望んでいるところで、一緒にお話を申し上げているところです。

そんなふうに、まだまだこれから少子化、今言いました吉田に代表されるような地域がこれから出てくる。それを何とか守っていきたい。先ほども災害の話が出ました。災害で一番大事なのは命です。それは皆さん十分承知しています。ただ、命が助かったときに、自分たちのよりどころは何だったんだろうか、そこを考えて、必ずこの地域の文化、または育った文化、そういうものが自分たちの思い出として出てくると思うんですね。

地域の文化が守られればありがたいなというふうに思っております。御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】

最初の４人の方々が本当にすばらしいお話をされまして、聞きほれていたんですけれども、発言者５さんと、それから発言者６さんからは、しかるべき文化、これを保存し、大切に継承していくための要望が出まして、それなりに喜んでおります。

和食がユネスコの世界無形文化遺産になったわけですね。日本が、1853 年にペリーが来て、54 年に和親条約が結ばれ、いよいよ 58 年に通商条約が結ばれた後、どんどんと外国人が入ってくるようになって、一番感動したのが富士山だったと。それからもう花見の季節、桜吹雪の中でその美しい日本の桜に感動し、それから日本の衣料文化、そして見事にそれ

を着こなして、そしておもてなしをするということで、芸者というのは日本の３つの代表になったわけですね。富士山と桜と芸者さんと。

ところが戦後になりまして、芸者さんのお仕事がだんだん少なくなって、そして新幹線ということで、桜吹雪の中を新幹線が疾駆するという技術の日本というのが出てきたわけですが、そうした陰で芸者さんの活動舞台が少なくなってきた。京都、金沢、あるいは静岡県ですと熱海とか伊東とか長岡というところに残っております。

そして、それはやっぱりパトロンがいないとだめなんですね。京都は今世界で最も魅力のある都市ということで、多くの人が来られて、そして芸者衆が住まわれている近くに外国人が住まいを求めて、日本でしか味わえないというそれを味わっているわけです。また金沢も商工会議所が東町とか主計町とか、そういうところをしょっちゅう売り込む、また自分たちも使うということを通して、芸者を守っております。これは静岡の場合には、今のところ、清水で少し商工会議所の方が援助をなさいまして、清水芸者の方でも少し小さな火がもう一度灯りつつあるということですね。

今、発言者５さんの方から、おもてなし科、おもてなしのプロ中のプロだから、そうしたものを学業の中に入れたらどうかと、これはもっともなことではないかというふうに思います。実はホテル学だとか、観光学だとか、こうしたものはグローバルな、例えばアメリカですとコーネル大学、それからスイスですとローザンヌにそうしたトップの大学があるんですが、彼らがやるおもてなしというのはヨーロッパ、欧米風のものですね。日本はやはり畳文化がありますし、着物文化があります。

和服が世界無形文化遺産になるときに、どういうふうに出すか。舞姑さんだとか芸者衆だとか自分で着付けができるということは、その立ち居振る舞いがきれいですよね。どんな豪華な欧米のドレスを着ても、そこに着物で出かけると全く遜色なくて、すべてがあっと息をのむ。やはり帯、あるいは着物、その豪華な使い方ですね、また季節において違う、ＴＰＯに応じて違う、コンビネーションの美しさ、またその髪ですね、こうしたものを全部含めて、見ただけで皆さんが感動するというものですから、和食と和服、衣食住、日本の数寄屋建築、こうしたものは江川邸がそうでありますように、建築、衣食住、それぞれの最高の粋を芸者さん、粋ですね、粋なものをやはり代表としてやられるんじゃないかと思いますよ。

ですから、これは残していかなくちゃいけないので、どういうふうにしたら、おもてなし科のようなものを通じて、若い青年たちが働く場があるわけですから、あやめさんから

入っていって、実習をして、その方に得意な子は訓練を積んで、芸事をマスターしていって、それで生活ができるようにしていくということですね。

今、見番が風前の灯火だということで、何とかこれを支えないといけないということで、ちょっと工夫をしましょう。この長岡をあずかっておられる市長、それから我々、またこれは伊豆長岡だけじゃなくて、熱海や伊東や、それから清水や、一部まだ若干残っているところがあるように存じますけれども、そういうところと不公平感があってはいけないので、そこらあたりを勘案しながら、やっぱり日本のおもてなしの粋ということで、両方ともこれは芸になる、一方は学芸、こちらは芸能ですね、そういった道に通じています、芸道という。道というのは日本の文化じゃないでしょうか。道場の１つがそういうお座敷であるというふうにも言えるでしょう。

ですからこういう誇りを持って、しかもカナダに留学されたというんですから、ツアーガイドをされたというんですから、もう初めからグローバルな芸者さんで、お母さんやお姉ちゃんとはひと味違う国際化して、これは日本の宝だということを発言者５さんは確信されていらっしゃるわけです。こういう人がいるのはうれしいじゃないですか。そういう意味で、世界を見た目で見たこの長岡の財産ですよというメッセージですので、これはやっぱり正面から応えるということが必要だと思います。

それからまた発言者６さん、江川家の文書だけでも 10 万点あるんですか。今、国の方で調査が終わったのが３万から４万点ぐらい、それだけでも膨大ですけれども、対馬の宗家文書が７万点ぐらいで、それを抜くかもしれませんね。そうするともう日本一というそういう文書になるんじゃないでしょうか。

そういうことに携わってこられて「伊豆学」と。伊豆学研究所ですから、ですから伊豆長岡、この伊豆の国市にとどまってないで、南伊豆も行っておられるわけです。それをどういうふうにしたらいいか。今「美しい伊豆創造センター」というのができました。これは伊豆 13 市町が一体になってやっていこうということです。ですから伊豆は１つということでございますので、そこに学術研究というものを入れ込んだらどうかと、差し当たってはですね。そうすると、伊豆の国市だけでなくて、お隣の伊豆市も、伊東も、賀茂地域も皆入ることになりますので、美しい伊豆創造センター、これなかなかいい今活躍をしつつある、しかも世界に売っていこうと、ジオパーク、あるいは韮山の世界遺産。

そもそも 1930 年代に川端康成先生がこちらにほれこまれまして、『伊豆の踊子』を書かれたと同時に『伊豆序説』を書かれましたね。伊豆は詩（うた）の国であると、うたとい

うのは詩、伊豆は詩（うた）の国であると。伊豆は日本の国の歴史の縮図であると。伊豆は南海の贈り物であると。伊豆は全体として美しい一つの公園であるという５つぐらいの項目をさっと書かれて、『伊豆序説』として見開き１ページぐらいのものでありますが、このノーベル賞を取るような優れた感性を持った人が、伊豆を五箇条にまとめられているんですよ。

私はこれを伊豆半島の五箇条のご誓文だと、そういうふうに思っていまして、これを入れ込んで、そしてその歴史や文化や、ジオパークは自然でありますから、そうしたものを学術的に研究していくことがすごく大切で、その中に残っている、例えば芸者文化というのを、そこで皆さんの寄附やあるいは公費を活躍して、調査や研究をして、保存するべきものは保存に協力をしていくと、こういうことにつなげられるのではないかというふうに思います。

ですから私の方で約束はできませんけれども、美しい伊豆創造センターは生まれたばかりですので、そこにしっかり伊豆学研究会の方も入れ込んでいくというのが、今のところは最もすばらしいと、差し当たってお答えしたいということでございます。ありがとうございました。

【発言者２】

言うのを忘れていました。先ほど発言者３さんのお話を聞いていて、生コンクリートの工場が果たすべき役割として、すごく重要なのが災害時の復旧です。当然ながら、その災害の後の仙台、東北地方を見に行ってきたこともあるんですが、すぐにコンクリートというのは必要とされます。被災２日後から仙台では工場が動き出したと。そんなときに私たちおたおたしてはいけないと思っていますし、地域の皆様と顔が見えるような存在でなければいけないと思っています。

防災もそうですし、もし緊急のときがありましたら、実は生コン車、ぐるぐる回っているあのドラムの中に水いっぱい貯めておくことができます。水源に活用できます。移動できます。また無線が入っています。スマホがパンクしたとか、全然だめなときに、無線は結構簡単に連絡網になり得ることがあります。どぶさらいのときに喜ばれるぐらいの存在じゃなくて、実は結構役に立つ生コン屋であるということを忘れておりましたので、ちょっと失礼いたしました。

【発言者６】

私も文化財を守るということばっかりに力点を置いていたので、生かすということにつ

いてお話しさせていただこうかなというふうに思いまして、ちょっと話をさせていただきます。

文化財を守るための拠点ということをお話しさせていただいたんですけれども、反射炉が世界遺産になった、そこも含めて、ここの地域にはたくさんの文化財があります。幸か不幸か、伊豆は開発から残されているというわけじゃないでしょうけれども、自然、それから文化財がたくさん残っております。これを例えば松崎ならなまこ壁があります。その隣の南伊豆には、小さな話ばっかりになってしまいますが、伊豆石でつくられた立派な石垣等がたくさん残っております。こういうものを活用して、できれば今、美しい伊豆創造センターの中でも、着地型の観光も十分考えていらっしゃると思うんですけれども、そういう文化資源を研究しながら、それも発信できたらいいなというふうに思っております。ちょっと付け加えて話をさせていただきました。ありがとうございます。

【発言者１】

私が始めたころ、10 年前は県の募集人員、就農しませんかという募集人員が 10 名もなかったぐらいで、それに対して同じぐらいの人数ということで、倍率がほとんどなかった。それが、私が始めて数年後には県の募集人員に対して応募が殺到して 40～50 人。そのときはやりたいと言ってもできない人が結構たくさん出てしまった。今どうなっているかというと、今は募集人員に対してちょっと足りてないという現状があるようです。

その原因というのはよくわからないんですけれども、ほかの県とかでもそういう支援制度を充実させて、ほかの県に流れているという現状もあると思います。例えば福井県などは、結構農業で売れている雑誌にでかでかと福井県で農業しませんか、福井県独自の就農支援政策がありますと、そういうのをうたっています。

この就農支援、静岡県は結構先進的に進めてきて、そうやって募集がいろいろあって、昔はたくさん来てくれたけれども、今はそうやって流れてしまっているということで、ここでもう１回、先ほど言ったように、この実績をうたって、またたくさん応募が殺到するようなことを県とか市でもっとどんどん発信した方がいいかなと思います。

【傍聴者１】

初めまして。東京から来ました傍聴者１と申します。実は 1994 年 11 月４日、伊豆半島の山奥の 40 代、20 代の若者たちが世界の国際ストーン展というのに岩を持ってきて発表したんですね。その自然の美しさに私はびっくりしました。

これでお願いがございまして、実は鉄道、今と未来のお願いがありまして、伊豆半島全

体のバランスを見まして、地形的に今、伊豆箱根線が最高傑作だと思うんですね。そしてもう１つ未来、伊豆の山々から海に向かってモノレールをお願いしたいんです。そしてこれを展開するには資金が要ります。この先ほどの伊豆の山々の若者たちが世界に殴り込みをかけて伊豆の岩を持ってきた、その柿色の石です。柿木石と思います。日本で雨の水が１番か２番ぐらいに含んできたと思います。ぜひこの構想の実現をお願いいたします。よろしくどうぞ。

【傍聴者２】

市内の傍聴者２と申します。私、静岡県のマンション管理士会というものに入っておりまして、その中でいろいろと問題が提起されております。この伊豆の地域には、やはりリゾートマンション等が多いものですから、これからマンションの老朽化、これに対して知事はどのように考えていらっしゃるのかという点です。それに対して私個人としては、マンションのデベロッパー（開発業者）の方も、建てて終わりと、そういう考えではなく、建てて取り壊しまで責任を持ってもらわないとという考えがあります。

それに対してマンションの建設会社等の供託制度というものを置いて、建て直しができるマンションはいいんですが、取り壊しができないマンションが老朽化してゴースト化し、または犯罪の温床にもなる可能性もあると思っております。ですから景観にも問題が出ると思いますので、この供託制度を使って、不良マンションが発生したときには、その取り壊しの費用に充てると、そういう形をこれは区分所有法とか各法律関係も変えていかないとならないものですけれども、そのような方向で基本的にはマンションのデベロッパーが建てて終わりじゃなくて、取り壊しまで責任を持ってやるということが必要ではないかと、そのように考えますが、参考にしていただければと思います。

【傍聴者３】

沼津市から来ました傍聴者３といいます。以前、静岡空港からヘリコプターが下田と修善寺へ世界のセレブのお客様を伊豆半島に活気を持たせるように、そういう考えがあるなんていうのを県の方の話を聞いたような、見たような気がしまして、だから伊豆半島は下田と修善寺だけではなくて、静岡県の東部全域というふうなとらえ方にして、静岡空港ももっともっと人の経由地みたいになるわけですから、伊豆半島の真ん中である伊豆の国市にも寄ったり、熱海も寄ったり、沼津は大瀬とか、ちょっと見所がありそうだなみたいなところ、この間戸田の松城邸へ行ってみたんですけれども、ロシアからの大勢のお客様らしき方もいらしたりしましたので、ただ修善寺温泉と下田と静岡空港の行き来というだけ

では、もうちょっと活用する方がいいじゃないかなと思うんです。ちょっと気がついておこがましいですけれども、すみません、失礼します。

【川勝知事】

そうですね。伊豆半島にまで空港を利用して来ていただくということについてはいろいろ考えております。もちろんセレブの方たちがプライベートジェットで来られて、そしてヘリコプターで伊豆半島に降りられるというのも１つですし、空港に新幹線駅ができれば、三島で降りられると伊豆半島に来やすいでしょう。そういうことも考えておりますし、またさらに清水港からフェリーに乗ってバスでめぐるというのもありですし、中には自転車でやりたいとか、いろんなお客様がいらっしゃいますので、伊豆半島全体を見ていただくようにというそういう考えでやっております。ヘリコプターはそのうちの１つということでございまして、修善寺だとか下田だけに限定しているという考えではありませんから、どうぞご安心ください。

ロシアはプチャーチンの船が沈みまして、それを戸田で直しましてということで、そのロシアとの関係というのは、ペリーさんとの関係をよく言われますけれども、ロシアとの関係も 150 年以上前の伊豆の方たちが助けたんですね。それを『戸田号』というふうに名付けて、富士市の田子の浦にそれを復元するというそういう運動も起こっております。ロシアとの関係は深いということです。

【局長】

先ほど傍聴者２さんからお話がありましたリゾートマンションの老朽化については、実はこの伊豆地域、ホテルも相当古いホテルがありまして、老朽化しているというところがありまして、これについては県も市も問題意識を持っていますので、これを何とかしたいというふうに考えておりますので、またよろしくお願いします。

【傍聴者４】

こんにちは。三島市から来ました傍聴者４と申します。本日はどうもありがとうございます。今朝、伊豆長岡の駅を降りて、こちらの会場に来るときにもなかなかわからなくて、観光協会の方にすごく親切にしていただいて、まるで京都に来たようだというぐらいにおもてなしの心がすばらしくて感動しました。本当にどうもありがとうございます。

それで、おもてなしの心という点で１つお願いがあるんですけれども、実は先日、フランスから芸術家の方がいらっしゃったときに、そのときに日本の古典、いろいろな芸能に

ついて実際に触れてみたいというような要望があってお話しする機会があったんですけれども、そのときに古奈の写真をお見せしたら、ぜひ行きたいとおっしゃられたんですが、日程の都合上、残念ながら上野の森の美術館を終日御案内して、日本のきれいな庭園が見たいということで、東京泊まりになってしまったんですけれども、そこで静岡県の方皆さんにお願いしたいのは、海外の方が何かの機会にいらっしゃったときに、例えば2014年の10 月１日から免税品の対象が拡大しましたので、そのときに例えばショッピングするときには８％の消費税がここに行くと０％になるというようなことを、普通の街角を歩いている人が簡単に御案内できたりとか、あと日本は空気がきれいで水もおいしくて、テロがなくて安全で住みたいというような声があったときに、例えばこれぐらいのＡ４サイズの表裏くらいで日本は国民皆保険です、そして医療も整っています、いろいろなよさを簡単にまとめた、インターネットを見ない方でもわかるようなものを御用意いただけないかと思っています。

あと先日、私人生で初めて能楽というものを観賞させていただいたんですが、静岡県ではグランシップ静岡ということで、すばらしい 1,000 円で能楽の講義が受けられて、そして観賞できるということができたので、そういった形で歌舞伎座の立ち見席 1,500～1,600円で歌舞伎が見えますので、そういった常に海外の方もふっと来たら、あっ能楽も見れる、先ほどの芸者の方の話じゃないですけれども、伝統芸能、ここに来れば見れる。おいしい魚介類が食べられる、温泉も入れる。そして免税店にわざわざ行かなくても、通りを歩けば免税加盟店に立ち寄れて買い物ができる。そして国によっては、イチゴもそうですけれども、ミカンもそうですけれども、この国では食べられるけれども、海外に持ち帰れない、ＴＰＰとか関係なく楽しめるというのも、全部農業の方と一緒になって連携プレイをもうちょっとうまくできて、それで一般市民が何か問い合わせを受けたら、海外の方が体調不良になったら、もしくは救急車を呼ぶときには英語版のものがパンフレットがあって、それを差し出して手助けしてあげるとか、常に小学生でも幼稚園でも高校生でもそういうような形で連携プレイがうまくとれるような簡単なパンフレットか何かを作成いただけたらありがたいなと思います。

【傍聴者５】

市内に住んでおります傍聴者５と申します。よろしくお願いします。

２点あるんですけれども、１点目は道路の問題です。静岡県を見渡すと、中部・西部に比べて東部は大変渋滞が多く、また道路自体が混雑しています。そんな中で、これから観

光でもし伊豆地域を訪れていただけるお客様に対して、やはりこの渋滞というのが非常にネックになってくると思います。今伊豆中央道、そして伊豆スカイライン、有料道路もありますが、この辺の有料の道路、料金所があるということもまた１つの渋滞の原因になっておりますし、100 円、200 円の有料区間を設けて、そしてその渋滞のリスクをどのようにお考えでいらっしゃるのか。

そしてこの伊豆スカイラインです。知事が御就任されたときに 200 円で開放したことがあったと記憶しています。このときに多少、お客様が増えたというような報告もいただいておりますので、今後このスカイライン、県道というだけでなく国道も含めて、道路のことについてお考えを伺いたい。

そして２点目は施設の問題です。県の施設が中部・西部に対しまして東部には少ないと常々感じております。体育館、あるいは芸術的な文化施設、この辺を伊豆の地域、東部にぜひ大きなものをお願いしたいと思っています。今、観光の機運もありますし、世界遺産の反射炉、あるいは東部の地域資源を生かした、文化を生かした、そういった世界に誇れるような施設が、ぜひこの伊豆地域にいただきたいと思っていますが、その点についていかがでしょうか。

【川勝知事】

ありがとうございました。道路はよくわかっておりまして、優先順位がありますね。伊豆縦貫自動車道、これを下田までつなげるというのは最優先です。何しろ伊豆半島、海岸に多くの方々がお住まいでありますので、いざというときには背骨となる伊豆縦貫道というのが必要です。ちょうど東北自動車道がその役割を果たして、そこから櫛の歯のように三陸海岸の方に降りていって、皆様を救援したわけですね。そのような役割を伊豆縦貫が果たすということで、伊豆縦貫につきましては、一度も予算が先送りされたことはありません。ですから国交省はここの役割をよくわかっておりまして、着実に進んでいるというふうに思っております。私も期成同盟会の会長として奮闘努力をしているところでございます。

それから伊豆半島、確かにそうなんですよ。県庁所在地にいろんな県の施設があるので、その不公平感というのをよく承知しております。今度世界の人の目が集まるオリンピック・パラリンピックがございますね。その中の１つの競技の幾つかの種目が伊豆半島に来る可能性は非常に高くなっておりますので、これを契機に県としてスポーツの伊豆半島、スポーツ観光と言ったらいいかもしれません。そういう特色を生かした施設整備をしよう

というふうに思っております。

これは伊豆の国、あるいは伊豆市、関係市町と交通ネットワークも含めてやらなくてはいけませんので、差し当たってはそれですね。具体的に何をどこにということを言っていただく必要がありますので。

伊豆半島にはもう何百回も来ておりまして、その可能性については私も皆様方に勝るとも劣らないぐらい確信しているんですが、これから攻めていかないといけませんね。日本の伊豆半島は何となく皆さん辺境だと思っていたら、実は違うと。ここは宝のいわば山がここにあると。世界に打って出ようという人が出てきているでしょう。ですから攻めの観光をしていかなきゃいけないですね。

ですから、世界でどういうところが人を集めているのかというところを伊豆半島の方たちが、空港がありますので、空港が就航している先ぐらいをお友達と１回巡って、そのおもてなしのやり方だとか、向こうの生活習慣だとか、昔の敵情視察ですね、相手のことを知らなければおもてなしもできませんので、そういうふうな意識改革もこれから必要になってくるんじゃないかと。

韮山の反射炉は、これは世界の宝物になったんですから、ですからもう地球人類の共有財産なんですよ。何しろ何も技術者がいないところで、本だけ見てあれだけのものを造っちゃったんですから。実際に大砲を造ったんですから。仰天のことで、いかに知的レベルが高かったか。匠の技が高かったか。一事が万事で、ほかの面においてもそういうものを持っている地域なんですね、ここは。

そういう意味で、ないものねだりをするより、あるものの価値をもう一度再発見して、世界の人がここにくればぽんとお金を落としていきますから、そして観光というのは平和産業です。戦争しているところにだれも観光に行きません。病気が蔓延しているところにも行きません。ですから観光が活発だということは平和である証左なんですね。観光を活発化するためにはグローバルなスタンダードなおもてなしが必要なんですよ。着物はグローバルな、アトラクティブな文化なんですよ。

ともかく上手にいたしますと、ここは「ナポリを見て死ね」という言葉がありますけれども、死ぬ前に一度世界で最も美しい半島を見て天国に行くというような、そういうキャッチフレーズを上手につくりたいものだと思っているところであります。

ちょっと直接の答えにはなりませんでしたけれども、全体今日は大変すばらしい広聴会になりました。心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。